

注目の「ロックウール栽培」を探る。

県農業試験場八代支場を訪ねて

グリーンピックのおばけトマト。
楽しみですね。

つばば科学博で大きな話題を提供してくれた、一万三千個の実がなるおばけトマト。誰もが関心を持ったものでした。農業も土も使わない、水気耕栽培「スビード生育」に加え、無農薬で病気に強く収穫量が多いとあっては、まさに一石三鳥といえます。



石綿と培養液だけで培養する。
それが「ロックウール栽培」です。

ところで、ロックウール栽培とはその名のとおり石綿（ロックウール）を用いずに培養液だけで作物を栽培する方法です。土耕と水耕の中間の栽培方法と言ってもいいと思います。ビニールハウス二棟（二百五十平方メートルと二百平方メートル）を使って、ロックウール耕と水流式の栽培が試みられていました。長さ九十一センチ、幅三十一センチ、厚さ七・五センチの長方形のロックウールポットに植え付けた苗が置かれています。そこに、電動タイマーでセッティングされた養液（液温十八度〜二十度）が一日五回、十五分間ポタポタと点滴されています。設備に高い費用がかからず、安い資金で多角経営ができるということ。また、立体的なので、耕地面積が少なく済み、後継者不足の解消にも一役買います。

つくり方も驚きですが、
味も形も見事です。

ちょうど、メロンの最盛期。根をくもりの巣状にはりめぐらせたパイヤメロンやホームランメロンが添え木に支えられ、一本に一個ずつの実をつけ、行儀よく並んでいる光景に出会いました。粒揃いと云うのは、こういうことを言うのでしょうか。

ママさん特派員
松岡 町子さん

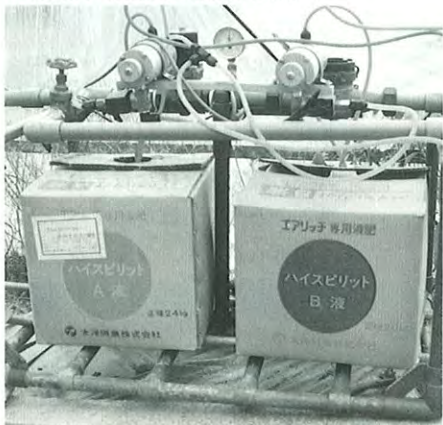


開かれる「クマモトグリーンピック'86」にも登場するということで、再び多くの注目を集めよう。私も、パイオテクノロジーの象徴のようなこのトマトを熊本で見ることができるといって、とても楽しみです。

パイオは、今や、いろいろな形で
農業に活用されています。

しかし、一方、あのおばけトマトと従来の農業がどう結びつくのか、今ひとつピンとこない気もする。パイオという言葉は知っていても、実際にかんがりの規模で広範囲に利用されていることを知っている人は少ないと思います。季節もの

この機械から自動的に養液が送られる



れも玉太りにばらつきがなく、その形のいいこと。秀品というべきか、試食したメロンのさっぱりした味、口あたりの良さはまさに夏の味覚にピッタリ。見ても食べても見事というほかはありません。

「土を忘れるのでなく、土を再生
するための一歩進んだ農業」です。

土の大切さを忘れ、見捨てて、ロックウールに取り組まれた、というのは決してありません。土の大切さを充分認識したうえで、一歩先んじた技術の必要にせまられてなされた研究なのです。連作障害を生じ、病原菌が着生しやすい土、養分のアンバランスで痛んだ土、そんな土をいたわり一時休憩させて、土の再生をはかろうと登場したのが、このロックウールなのです。

デンマークで開発され、オランダで盛んになったこの技術。日本流に組み替えられ、地域に合ったものとして農業に取り入れられたのは、つい最近のことです。

かけ声や好奇心で、ただ目先の新しさに飛びついたので、研究に研究を重ね、実際の農業に役立つよう試行錯誤を繰り返して、一歩進んだ農業技術に取り組まれたこと。家庭菜園なら受けて済まされることも、県の試験場とあってはそうもできない。と語られる技術員の方々の責任も並み大抵ではないようです。

野菜が、今では旬に関係なく出回っています。真冬のスイカの甘さには戸惑いさえ感じます。これも、「パイオ」の利用によるところが大きいのだそうです。

そんな時、「ロックウール栽培」という言葉を耳にしたのです。農業の経験など全くない私ですが、とても興味をもちました。この栽培の研究に取り組んでいただけるのが、私の訪れた県農業試験場八代支場の職員の皆様です。

家庭用ロックウール栽培で、庭先に
鈴なりのトマトも夢ではありません。

ここには、県内外から貸切りバスを連ねての視察が絶えないそうです。しかも最近には特に婦人会の見学が増えたと聞き、心強さを感じました。近い将来、庭先でも手軽にパイオに挑戦できる日が来るかも。と胸はずませていたところ、このルポを書いている最中に、もうビックリ。こんな新聞記事を見つけました。

「ロックウール（石綿）を使った家庭向けベランダ栽培用製品を販売する。栽培用の新しい培地としてロックウールを利用、手軽に年中栽培できる。」
我が家の庭に鈴なりになったトマトを夢見ている私です。



ロックウール耕によるメロンの栽培